

米沢女子短期大学における校風議論とその形成

―一九五〇年代から六〇年代の『同窓会誌』にみる北海道への
いわゆる「渡道女史」の教員就職と同窓会北海道支部設立過程を事例として―

布施 賢 治

要旨

設立直後米短には校風がないと在学生により論じられたが、昭和三十一年の北海道冷害における北海道に教員就職した卒業生への援助活動および開学五周年記念事業を通じて校風確立に対する前向きな意識があらわれる。初期卒業生の多くが正規教員職を求めて北海道に就職し、彼女たちは親しみをこめて「渡道女史」と呼称されたが、大学側はそのような動向を米短の発展の証しとして評価し、北海道での教員就職を積極的に援助した。彼女たちの北海道での活躍により、昭和三十四年に網走地方で「北海道での教員としての奮闘と開拓精神」という校風が対外的に確立する。校風の確立は在学生の北海道での教員就職の有利さや同窓会支部設立などの動向をうながし、大学と在学生と卒業生の結束を強めることに作用し初期米短発展の原動力となった。校風をめぐる議論は、戦後の混乱期のなか開学した米短が建学の理念と社会的使命をいかに果たしてゆくかという模索そのものであった。

キーワード 校風 北海道 教員 同窓会 研修旅行

はじめに

本稿では公立の女子短期大学として昭和二十七年（一九五二）に開学した米沢女子短期大学（以後、米短とも略して記す…布施註）における校風をめぐる議論とその確立という問題について、卒業生の北海道への教員就職と同窓会の北海道への支部設立、それらに対する大学側の支援という事例をつうじて検討する。校風とは「その学校が特色とする気風」と『広辞苑』第三版には定義されている。通常、一定の歴史のある学校には校風が存在するものとみなされ、在学生や卒業生の行動や特色として対外的にも認識され学校の魅力や活力をうみだす要素ともなっている。

米短は戦後に確立された短期大学という制度にもとづいて昭和二十七年に米沢市を設置者として設立された歴史の新しい公立女子短期大学であった。公立短大のなかには戦前からの母体をもとに設立された学校もあったが、米短はそのような母体をもたない全国でもめずらしい短大であった。

そのような特色をもつ米短の開学初期の入学生たちは米短の校風とはなんであるうかと校風について議論し、米短の教員もさまざまな場面において米短の校風確立について意見を述べている。校風議論の背景には、新しい短大である米短が戦後のまだ混乱がおさまっていない社会状況のなかで、どのような卒業生を輩出し社会に認められていけばよいのか、という米短の建学の理念と社会的使命の確立を模索していたことが要因としてあったと考えられる。

初期卒業生の多数が北海道に教員として就職したこともあり、校風の議論とその対外的確立は、北海道と米短の教員や同窓会・教員となつた卒業生、さらには北海道側の教育関係者らによるさまざまな社会的関係性のなかでみられてくる。具体的には昭和三十一年の北海道冷害への援助活動および北海道研修旅行の実施、そして網走地方での卒業生の活躍と同窓会北海道支部設立などの事例を通してである。そして「北海道での教員としての奮闘と開拓精神」という校風が対外的に確立する。

校風議論とその確立という経過を通じて、米短は自身の建学の理念と社会的使命とを自覚し具体化することが可能となり、在学生・卒業生・短大教員ともにそれを原動力として米短の社会的使命の実現に邁進して行くようになる。校風をめぐる議論とその確立の問題を検討することは、開学初期の不安定な米短さらには在学生や卒業生たちが、戦後間もない混乱的な社会状況のなかでどのように自己を確立し、安定した学校運営を可能にすることができたのかということを明らかにすることにつながり重要であると考ええる。

本稿でも使用する史料は同窓会が発行した『同窓会誌』に掲

載された在学生や卒業生や教員の手記や原稿である。^①同窓会は昭和二十八年（一九五三）三月第一回の卒業生輩出とともに設立され『同窓会誌』を発行した。昭和三十七年（一九六二）四月の同窓会定期総会において会名を「さわらび会」とし会誌名も『さわらび』と変更することが決定され同窓会誌の十号からは『さわらび』となった。本稿で使用した史料のほとんどが『同窓会誌』なので註記は本文中に記している。

『同窓会誌』に掲載されている卒業生や在学生さらには教員の手記や原稿は、同時代における日本の社会や政治経済状況のなかで語られる、彼女・彼らの米短や教員就職などの問題に対する考えや発言であり貴重なものである。内容には脚色や少なからぬ誤謬なども含まれていると推測されるが、それをふまえても彼女・彼らは率直に心境を記しており、他に同時代における彼女・彼らの考えを明らかにできる史料が存在しない以上、史料として十分に使用できると考えられる。また史料上においては校風や学風や気風などの用語が使用されているが、本稿においては校風という用語に統一して使用する。

なお、米短の設立過程、北海道への教員就職、新聞記事史料については、拙稿「戦後地域社会史としての米沢女子短期大学の設立過程」〔『米沢史学』三〇、二〇一四年十月〕にも記している。

第1章 校風問題の発生と議論

第1節 米沢市議会における学長問題

昭和二十七年四月一日米沢女子短期大学は開学した。学長は千喜良英之助であった。四月十五日に入學式を、二十九日に開學式を挙行した。入学者は家政科一〇八名、被服別科四九名の計一五七名であった。校舎は現在の米沢東高等学校の校舎を借用したものであった。開學準備があわただしかったこともありさまざまな問題を抱えていたが、開學当初問題となったのは学長問題であった。

これは学長の千喜良英之助が米沢興讓館高校と米沢東高校の校長をつとめており、さらに米沢女子短大の学長を兼ねるのは無理なのではないかという米沢市議会での議論であった。戦後の新学制の混乱のなかで、新制高校は男女共学をとどこおりなく実現するため統合することで解決を図った。興讓館高校の校長であった千喜良がもともと高等女学校である東高校の校長をつとめていたのも、昭和二十五年（一九五〇）四月一日に両校を統合することで男女共学を実現したことによる影響であった。昭和二十七年四月一日に両校は分離したが、分離以降も千喜良は両校の校長を兼任していた。

四月二十四日の定例会一般質問においてある議員から「このたび各方面の御協力によりまして米沢市立短期女子大学が新設されました。四月二十九日は天皇誕生日にめでたくも開校式を挙行すると聞いております。創立第一回名誉あるこの重大な学長は既に大学の教授会によって満場一致千喜良英之助君が内定しておると仄聞しておりますが

いまだに発令されておらないと聞いております。（中略：布施註）米沢女子短期大学の学長ひいては最高人事が円滑に処理できないということは当局の教育行政における責務を全とうする用意が極めて欠けておるのではないかと本員は思う次第であります」という質問がなされている。

これに対して高橋広吉市長は次のように答えている。

教育委員会にかけるときに教諭陣だけ申請が出て学長の申請はなかったので教育委員会としても変に思ったというので教育委員会の空気は東西の両高等学校（興讓館高校・米沢東高校のこと：布施註）をもつてなおそれ以上大学の学長を兼ねるということは無理であるというので、なまじつか出すのでは否決されると困るというので関係者が押えておったそうであります。（中略：布施註）千喜良校長に対しても学長は三つの学校を統率して決して事務の渋滞を来たさないと裏書を出してもらいたいというので千喜良校長に話して承知いたします。必ず間違いなくやりたいというので打合せ完了しております。教育委員会の開催日はいつであるか、おそらく二十九日までに向うからはっきりした許可の辞令は来ると思います。

三校の校長・学長を千喜良が兼ねることに對して教育委員会のなかに反対的な意見があり、それをふまえて米短設立の関係者が千喜良を学長に推すことに慎重になっており、学長就任の許可と辞令交付が遅れていたことがうかがえる。市長は四月二十九日の開學式には辞令交付が間に合うだろうと述べている。

さらに議員は「千喜良校長が二つの学校をもつてもう一つの学長を

もつという、こういうようなことで果して教育行政を共に支障なく遂行されるか」と質問したのに対して、高橋市長は「学長の問題千喜良氏の人格、長年の全歴で他の人を物色する考えはなく私は学長の就任を期待し二十四・二十五の両日教育委員会を開くそうでありますから教育長の決定をお願いする考えであります」と答えている。

学長には千喜良しか適任者はなく、県の教育委員会の決定も問題なく行われるだろうと述べている。米短の設立は昭和二十六年に急いで行われたこともあり、山形県議会や米沢市議会さらには文部省との困難な交渉を経て昭和二十七年の開学にこぎつけたのであるが、四月以降にもその余波は学長問題というかたちで及んでいたことがわかる。

第2節 開学初期の校風認識と北海道冷害援助活動

昭和二十八年三月二十日に被服別科の第一回卒業式を挙行し、同日同窓会の発会式も行われた。二十九年（一九五四）三月二十日には家政科第一回卒業式が行われ、五月五日には第一回同窓会総会が開催されるとともに、同日からは同窓会会則が施行された。同窓会の目的は第二条で「本会は母校の発展に協力し、会員相互の親睦向上を図ると共に広く生活文化の進展に寄与するを目的とする」とされ、第三条において事業として「母校後援に関する事業、会員相互の親睦に関する事業、生活文化に関する事業、会員の研修・会報・名簿の発刊、その他」とされた。会員は第五条で「米沢女子短期大学卒業生及現旧職員」とされた。

校風という文字が『同窓会誌』に最初に確認できるのは管見では昭和三十一年十二月（一九五六）の第四号においてである。同年四月に

新設された国語科に一期生として入学した一年生が次のように語っている。

この辺で本当の国語科らしい内容がもう出来てもいいのではなからうか、（中略：布施註）しかし他の科との融合面に欠けているところはなかったらうか、国語科が何かしら孤立的存在としてあった事はいない事実だと私は思う。二科のみの学内で、この事は何らかの方法で緩和されなければならない早急の課題だと思います。それが何に原因するのか、二科合同の授業数が極く少ない事、H・Rが離れていて話し合う機会が案外少ない事等挙げれば表面的な事はいくらもあると思いますが結局それは精神的な支え、特に国語科の人の中にそれのないのが最大の原因かと思われます。というのは創立科として同科の先輩をもっていないという事は（中略：布施註）、いふなれば国語科それ自身が卒業後、どれだけの社会的可能性があるのか、全く未知数であるところにその起因が認められる様な気がするのです。（中略：布施註）ここで考えなければならぬのは、同窓の意義なのですが、私は何も同窓生のあるべき姿などという定義めかしいものを言おうとするのではない、私自身そんな事は分らないというのが正直のところですよ。たゞ短大には校風がないという言葉は実に何ともいえない寂しいひびきをもつてはいまいか、校風はみずから作るもので外力によってつくられるものではないはずですよ。同窓会の存在がもっとどっしり皆の心に根を下しているならば、よって立つところの、何らかの虎神的支柱になり得る事は事実でしょう、そうすれば二科の交流もその上にたつて緩和され、国語科自身の存在も

安定度を加えるのではないでしょうか。(四〇頁)

学生は国語科と既設の家政科が相互に孤立していることや新設である国語科の将来に対する不安や精神的支柱が未成熟であることを指摘する。そのような諸点をふまえて学生は「短大には校風がない」とする。

注目されるのは、校風を作るための要素として学生は同窓会の役割を重視していることである。同窓会が皆の心に根を張ることで精神的支柱となり短大さらには国語科の活性化も図られ、そこから校風が生みだされてくる可能性を指摘している。

既設学科の家政科や被服別科からではなく国語科から校風の不存在の指摘が出されたことは、家政科や被服別科が多忙であること、新設ゆえの将来に対する不安が背景にあったことが理解できる。例えば昭和三十一年十二月の『同窓会誌』四号のなかで被服別科の学生は「私達被服別科の生活をふりかえってみると大変いそがしく勉強なり、仕事なりをしてきたと思う。(中略：布施註) 余りにも自分の仕事に追われていたせいか、学校側、生徒会側には関心を払っていなかった」(三九頁)と授業に追われその他のことを考える暇がない日常生活を述べている。

校風の形成を同窓会に求めていることは、同窓会誌への寄稿という文章の性質からその役割を重視したことも考えられるし、国語科の上級生・卒業生の不在、家政科との乖離という学生生活や就職活動を行う上での不利な条件を短大の同窓生というひとつ上位の母集団を見つけて出すことで解決し、同窓会に国語科・家政科の融合と在学生・卒業生の一体化としての校風の源泉としての役割を期待し、精神的支柱を求めたともいえよう。

教員側からも校風について盛んに指摘されるようになる。その契機になるのは昭和三十一年の北海道冷害に対する短大の援助活動である。昭和三十一年は全国的には豊作であったが、北海道のみは春以来の異常気象の影響で大正二年(一九一三)以来ともいわれる大凶作冷害に見舞われ被害総額は四億円に達した。とくに中小農家や開拓地入植者のうけた影響は大きかった。被害対象となる農家の児童・生徒は一六万人あまりと、全道児童・生徒数の約二割にのぼった。新聞・ラジオで冷害状況が報じられると、全国に「北海道を救え」という声⁽³⁾が広がり救援活動がさまざまな団体により行われた。

卒業生の多くが北海道に教員として就職していたこともあり、北海道冷害のニュースは米短にも大きく伝えられ同窓会と在学生によるさまざまな支援活動が実施された。同窓会は北海道に教員として勤務する卒業生六〇名余に往復はがきで現地の様子を知らせてもらうとともに、自治会にもよびかけて御見舞金・米・学用品などの寄付品を集めた。そして、とくに状況のひどい学校一二校に御見舞金を、さらにそのうちの六校に米・学用品を加えて届けた。

米短教員で開学以来学生部の要職をつとめた上村良作は『同窓会誌』五号(昭和三十三年九月)において北海道冷害に対する短大全体の援助活動について、それを校風形成につながるものとして高く評価した。

昨年の北海道冷害に際して、同窓会の御見舞いと共に、学生が「北海道の先輩を救援しよう。僻地に奮斗する先輩に続け」を合言葉として、基金、物資を募ったのも、結びつきを濃くする契機にもあったのであった。学生は先輩が就職後何に苦しんでいるだろうか、在学中もつと何をしてあげばよいと思っているかなどの問

題も知りたいと思っている。私共にも、又後輩にでもい、先輩の声を伝えてほしい。こうした目前のことからはじめ、各般にわたり有機的な結びつきをもつようにしたいものである。これが、一、二年制大学の学風や伝統を形成してゆく力になるのである。(一七頁)

上村は在学生が北海道冷害の救援活動を通じて、先輩達の北海道就職の問題や先輩とのつながりといった有機的な結びつきを意識しはじめたことを評価する。そしてこのような学生の自発的な動向がやがては、戦後の新制度である「一・二年制大学」としての短大の校風を形成する力になると指摘する。

第3節 前向きな校風認識形成の契機としての開学五周年記念事業

校風が学内でさらに議論される契機となるのは昭和三十二年(一九五七)六月に独立校舎第二期工事が完成し、米短が実態として整備されたことである。それまでは米沢東高校の校舎を間借するかたちで講義を行っていたが、短大専用の校舎が建設されたことで高校側に気兼ねすることがなくなり、学生の意識にも前向きなものがみられるようになる。

また昭和三十二年は開学五周年でもありその記念事業も行われた。事業は栄養士養成課程施設の認可を得ること、被服管理室の増築、附属図書館建設の要望、家政科講演会および講習会・国語科講習会の開催、記念体育祭・記念式典の開催などであった。また学生らによる発表展示も行われた。五周年記念事業は「参観者は連日引きもきらず、米沢市文化の祭典の観があった」と、意義深く賑やかに挙行された事

業であった。

学生の意識としても開学後の五周年をひとつの節目として認識し今後のさらなる発展の出発点と捉える見方が多かった。このような念願の独立校舎建設と開学五周年という好ましい雰囲気なかで、校風について学生たちがそれまでの議論とは異なる前向きな解釈を示すようになる。

国語科二年生の学生は五周年を契機として米短の気風をさらに校風に作り上げていく必要を指摘する。

今日近頃では、「米沢女子短期大学五周年記念」ということが、強く感じられるようになってきました。というのも、寄附を集めたり、新生徒会会長を中心に、多くの行事がそのもとに着々と計画されつゝあるからでしょう。創立後五年と云えば、この辺であたりには、わかることなく、もつと伸び伸びと自主的に行動し、自己という位置を築いてもいい頃だと思えます。多くの障害にぶつかるとは当然でしょう。そして、「校風」というものも生れてくることではないでしょうか。今でも「米沢女子短期大学」という気風はありますが、もつともつと女子大学として気品のある香りが、自然にたゞよってくるようにしてゆきたいものです。それには周りの人々の学校に対する態度が必要ですが、まず第一に、この大学に現在入っている私達の態度が問題だと思います。大学に入って卒業した、それ文ではすまないでしょう。大学生活の中に、生徒自身によって作られた雰囲気というものがあると思います。それが結局は「校風」ともなるのではないのでしょうか。今在学中の私達一人一人が、女子学生として立派な態度で生活してゆ

きたいものです。そうすれば、いつのまにか「校風」というものが生れているのではないでしょうか。（『同窓会誌』五、二三頁）

学生は創立五周年を米短の自己確立の出発点とみなし、米短が現在に持つ「気風」を「校風」に生み出すべく学生自身の努力を求める。彼女にとって校風は、気風から一步進んで女子大学としての学生のもつ雰囲気として自己肯定されるものであった。五周年という年月と校舎などの整備が女子大学という独自の存在を認識させる好要因になったと考えられる。

また家政科一年生の学生は校風をよりよいものにしていくことが私達の課題であると次のように言う。

「大学」ということは何かしら魅力的な響きが、一種の憧れとなって入学したのでした。しかし入学して少なからずがっかりしたのでした。校舎も借りもの、設備も充分でない、（中略：布施註）このような私の前に、又学生全体が満足すべき、喜ぶべき事柄が現われたのです。それは待ちに待った新校舎落成と創設五周年記念行事です。（中略：布施註）「やっと大学らしくなった」とある学生は言っています。（中略：布施註）五年間が過ぎ、ようやく米沢女子短期大学の価値が社会に認められようとしているのですから、（中略：布施註）今迄私達学生は、あまりにも社会に対して自分（短大生であること）を必要以上に卑下していた者が多かったように思われます。短大ということばの持つ響きが（四年制大学と比べて）そうさせているのかも知れませんが、それ以上に社会一般の人々の考えが偏見であったのではないかと思われるのです。それを打破するためにも学生一人々々が米沢女子短

期大学の学生であることに、誇りと自信とを持って進まなければならないと思うのです。そして学風をよりよいもの、より高いものへと形作って行くことこそ、これからの私達に課せられた問題であると思うのです。（『同窓会誌』五、二三頁）

学生は地域の大学として戦後設立された短大に対して憧れの対象としての「大学」像を投影して期待して入学したが、現実の短大との落差を感じていた。それは新設された短大の多くがそうであったように設備の不十分であったり、また地域の人々の短大という新しい教育機関に対する「偏見」（と感じられるもの）などであった。

そのような意識を払しょくしたのが新校舎建設と五周年記念事業であった。新しい設備と五周年という実績が学生の意識を「やっと大学らしくなった」と自身の学校を大学として自己肯定することを可能にした。そして「誇りと自信とを持って進まなければならない」と前向きの雰囲気を形成させそれは「校風」の問題として把握されるようになった。

この学生にすれば「校風」は、米短の短いながらも開学して五年という伝統Ⅱ「古さ」から形成されたものでなく、五周年という「新しさ」から出現したものであった。その「新しさ」とは、新校舎建設や地域の短大への理解の確立、在校生の短大に対する自己肯定の確立などといった、短大という新制度をめぐる環境の確立であった。この確立を感じそれを自己肯定する意識にたどりつくには、学生も指摘するように短大やそこに学ぶ学生自身のさまざまな葛藤を経ており、ようやくたどり着いたものであった。「校風」は新しさのなから今後形成されてゆくものと考えているのである。

『同窓会誌』において校風が語られるようになるのは開学五年目前後からである。新設された国語科に入学した学生の不安意識、北海道冷害への同窓会に呼応した在学生の援助活動を契機とする在校生の北海道に教員就職した先輩の意識化、開学五周年記念事業と新校舎建設により実質的に短大としての実態を備えた米短に対する在学生の前向き意識の形成などを背景として、校風が議論され出したといえる。米短に対する不安と期待という設立間もない短大が抱えるさまざまな状況から校風が議論されたといえる。

その議論の内容は、米短の不安定さや学内の不活発さ設備の不十分といった現実を背景としたものであったが、北海道冷害への対処や五周年記念事業や校舎の整備などにより学生のなかに先輩と有機的に結びつく意識や女子大学であるとの自負をとまなう自己肯定意識が生まれ、それが校風の発生意識となり、校風を学生自身がよりよいものに形作っていくべきとの議論に発展していったことがわかる。

設立当初という状況もあるが、古さというよりは同時進行形的な新しさのなかから意識化され議論され出すこと、また北海道に教員として就職した先輩を積極的に発見すること、形成され始めたばかりの同窓生や同窓会を重要な支柱として校風が形成されていくことに、特徴があると指摘できる。

第2章 北海道への教員就職と校風の形成

第1節 開学初期入学者と教員就職の状況

校風の形成とその議論に影響を与えた動向として、米短の卒業生が多数北海道に教員として就職したことがあげられる。彼女たちは北海道出身者ではなく単身北海道に赴き就職した。仲間もなく慣れない環境、現在よりも距離を感じさせる北海道の地において、彼女たちは一生懸命頑張っていた。

彼女たちは親しみをこめて「渡道女史」とよばれ(『同窓会誌』六、昭和三十三年八月、二七頁)、『同窓会誌』に現在の心境をさまざまに通信するとともに、北海道では米短卒業生の教員どうしで連絡を取り合っていた。

昭和二十九年三月に家政科第一期生の卒業生を送り出したが、そのほとんどが教員として就職した(表1)。特に注目されるのが北海道への就職であった。北海道は教員不足で本州にも積極的に教員の募集を行っていた。山形県にも山形出身の教員が募集に訪問している。このようななか、少

表1 昭和28年度家政科第一期卒業生の就職状況

	高校		中学		小学校		小計	教育関係	事務	その他	合計
	常勤	非常勤	本職	臨時	本職	臨時					
山形	7	7	8	8	3	15	48	6	3	4	61
北海道	1	0	6	0	4	0	11	0	0	0	11
福島	0	0	4	0	4	0	8	0	0	0	8
神奈川	0	0	1	0	2	0	3	0	0	0	3
宮城	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1
東京	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3
計	8	7	19	8	14	15	71	6	5	5	87

『同窓会誌』創刊号、4頁より作成。

表2 昭和29年度家政科
1期生・2期生の就職状況

	学校関係	その他	計
山形	89	2	91
北海道	27	0	27
福島	10	0	10
神奈川	3	0	3
宮城	1	0	1
その他	4	2	6
計	134	4	138

『同窓会誌 総会報告』6～7頁より作成。

表4 昭和31年度就職希望状況

北海道	42
神奈川	20
新潟	16
福島	6
秋田	5
宮城	3
岩手	2
東京	2
長野	1
栃木	1
静岡	1
京都	1

『同窓会誌』4、30頁より作成。

表5 米沢女子短期大学の出身県別入学者

	山形	東北5県	北海道	新潟	関東	他県	計
昭和27年度	170	2	1	0	0	0	173
昭和28年度	91	2	0	3	0	0	96
昭和29年度	104	15	1	16	2	1	139
昭和30年度	105	19	0	15	1	1	141
昭和31年度	100	28	2	12	1	2	145
昭和32年度	66	18	3	7	2	1	97
昭和33年度	86	28	9	4	2	1	130
昭和34年度	101	25	8	9	3	2	148
昭和35年度	130	35	17	17	3	3	205
昭和36年度	250	75	22	17	2	5	371
昭和37年度							
計	1203	247	63	100	16	16	1645

卒業生数をもとにしている。昭和36年・37年度は在学生数をもとにしている。

『米沢女子短期大学十年史』40・41頁の表より作成。

昭和38年度	115	43	15	14	3	6	196
昭和39年度	86	45	14	11	4	2	162
昭和40年度	89	51	11	12	10	5	178
昭和41年度	73	64	9	9	11	6	172
昭和42年度	79	54	11	11	17	5	177
昭和43年度	96	46	3	4	12	2	163
昭和44年度	119	39	5	3	2	1	169
昭和45年度	103	35	7	5	10	2	162
昭和46年度	113	34	2	3	4	1	157
昭和47年度	101	47	3	2	6	1	160
昭和48年度	98	55	4	3	8	2	170
昭和49年度	117	42	2	7	2	0	170
昭和50年度	104	46	1	5	4	2	162
昭和51年度	97	65	4	2	5	1	174
昭和52年度	93	64	2	4	1	1	165
昭和53年度	103	40	2	3	6	1	155
昭和54年度	102	40	2	3	0	1	148
昭和55年度	94	65	0	4	1	1	165
昭和56年度	90	62	0	8	4	1	165
計	1872	937	97	113	110	41	3170

家政科Aコース・被服コース・家政専攻・家政科Bコース・食物コース・食物コース・国語科・国語国文学科・被服別科・別科(別科は昭和50年度に廃止)、の4科の入学者。

『山形県立米沢女子短期大学三十年誌』38頁の表より作成。

表3 家政科・国語科・被服別科の就職状況

米短家政科・国語科の就職状況

	卒業生数	家庭	就職希望	就職者数内訳									進学
				教員	学校職員	官公庁	会社・銀行	栄養士	社会保育施設	図書館	報道関係	その他	
昭和28年度	103	8	95	71	1	6	10					6	
昭和29年度	72	3	69	49	2	6	7		4				
昭和30年度	106	8	98	83	1		10		3				1
昭和31年度	111	7	104	79	2	5	8		6			2	
昭和32年度	134	6	128	77	5	10	20		9	3	1		2
昭和33年度	76	5	71	45	2	6	10		5	1	1		1
昭和34年度	97	17	80	42		4	10		20	1			2
昭和35年度	112	8	104	44	1	8	17	22	6	2			3
昭和36年度	166	17	149	61	4	6	33	22	10	4	3		6
	977	79	898	551	18	51	125	44	63	11	7	6	15

米短被服別科の就職状況

	卒業生数	家庭	就職希望	就職者数内訳									進学
				教員	学校職員	官公庁	会社・銀行	栄養士	社会保育施設	図書館	報道関係	その他	
昭和27年度	44	37	7				2						5
昭和28年度	19	14	5										5
昭和29年度	17	8	9		1								8
昭和30年度	22	11	11			1	1						9
昭和31年度	20	17	3				2					1	
昭和32年度	7	5	2				1			3		1	
昭和33年度	16	14	2				2			1			
昭和34年度	19	13	6			1	5			1			
昭和35年度	30	18	12				11		1	2			
昭和36年度	36	30	6				5			4			
	230	167	63		1	2	29		1	11	2		27

『米沢女子短期大学十年史』42頁の表より作成。

なからぬ山形大学や米短の学生が北海道に就職したのである。

北海道の特徴として正規採用者が多いことである。山形は臨時採用が半数以上を占めるが、北海道は全員が常勤で採用されている。山形県では山形大学の卒業生と卒を争うことになり狭き門になりがちであったが、北海道に行けば正規採用される可能性が高かったことがわかる。このような要因が米短生に渡道を決意させることに大きく影響したと考えられる。そしてこのような傾向は二期生にも受け継がれている(表2)。以降、家政科・国語科の卒業生にとって教員はすくなくとも昭和三十六年までは最大の就職先であったといえる(表3)。そして昭和三十一年度の就職希望状況をみても山形県以外では北海道への希望が他県を引き離しており(表4)、北海道への教員就職希望者が多数であったことがわかる。

それでは彼女たちは北海道出身者で故郷に就職したのかというところではなかった。表5は昭和三十七年までの入学者の出身県別状況であるが、北海道からの入学者は昭和三十二年までは少数で、昭和三十三年(一九五八)頃から増加していることがわかる。このような傾向はすくなくとも昭和四十五年(一九七〇)までは確認できる。

表6は昭和三十七年度現在の卒業生居住分布である。これを見ると北海道には入学者以上の卒業生が居住していることがわかる。そして

その人数は東北五県の総計や東京を上回っている。この数字をさきの北海道への教員就職の数字とてらしあ

わせてみると、山形県および

表6
卒業生居住分布
(昭和37年9月現在)

山形	653
北海道	176
東北5県	152
東京	87
新潟	60
神奈川	31
関東	24
大阪	6
京都	4
兵庫	1
その他	13
	1207

『米沢女子短期大学十年
史』41頁表より作成。

び北海道以外の諸県から入学した学生が就職先として北海道を選択し、そのほぼ全員が教員になるべく北海道へ渡ったと指摘することができる。

北海道に渡った要因としては、北海道への憧れといったものもあるだろうが、現実的には当時の女性の就職先として有力であった教員になるためであり、山形や本州では競争があり正規採用になることは大変であったが、北海道に渡れば正規採用の可能性が広がっていたためであるといえる。渡道して教員になった同級生達を「渡道組」とか「意を決して北海道のセンセイになった」とか「北海道にイッチャッタ」(『同窓会誌』八、五三頁)と表現していることは、彼女らの渡道が決して安定なものとして選択されたものではなく、後述する彼女らの手記にもみられるように不安のなか顔見知りもない単独での渡道であったことを示している。

その一方で表4のように昭和三十一年頃より北海道からの入学者も増えてゆくが、これは北海道での米短卒業生の教員としての活躍が目立つようになるにつれ北海道から入学するようになったと推測される。北海道出身者にはまた当時の彼女たちなりの「内地への憧れ」があったのだが、北海道の高等教育機関の未整備などの影響もあり、米短への進学による教員資格取得という現実的な理由から米短を志望したと考えられる。

彼女たちは米短で学び教員等として再び北海道へ戻っていった者もいたと考えられるが、「道産っ子はそれぞれ地元へ帰りました」「道出身の彼女らは故郷におるはずです」(『同窓会誌』八、五三頁)と彼女たちの帰郷には同級生たちは悲壮感をあたえていない。

第2節 米短の発展のよりどころとしての北海道教員就職

教員就職が多数だったことに驚いたのがほかならぬ米短の教員であつた。短大の開設にあたり教員側は女性に教養をさずけるといった戦後の新しい教育の理念を念頭に強く抱いていた。しかし、実際に開学したら学生たちは教養だけでなく就職、特に教員での就職という明確な目的をもって入学してきたのであつた。

当初教員側は驚いていたがすぐにその動向を認め後押しするようになる。上村と同じく開学以来学生部の要職を歴任した本名正吾は『同窓会誌』創刊号（昭和二十九年十二月）で次のように卒業生に語りかける。これは教員側の教員就職に対する最も早い認識を示す文章であると考えられる。

卒業生の皆さんお元気ですか。二〇五名の皆様が職場に、家庭に各々理想を求めて、生活の確立に努力して居られることは頼もしい限りです。殊に第一期生家政科卒業生一〇四名中現在七十余名が主として教壇に立つて活躍されていることは、本学の誕生が、時代の要求に適合せるものであり、そしてその発展の証左がこれであるとか自負する次第です。南は神奈川から北は北海道のオホーツク海岸まで、子供を相手に高い声を張りあげて教えて居られる、凛々しい姿を思い浮べては、一人悦に入ることがあります。どうか呉々も身体に気をつけて職務に精励して下さいそして来春の卒業生も教員志望が多いのですから、後輩の引き立てと指導のため御尽力下さい。（四頁）

本名は教員希望者が多数のことに最も当惑した教員であつたが、卒

業生の結果を受けとめ、教員就職を多数輩出したことが米短の「時代に適合」し「発展の証左」であるとかまで指摘する。さらに来春卒業生までも視野に入れて教員就職を循環化してゆこうとする態度までみられる。本名がここでいう「時代の適合」「発展の証左」とは、戦後の新時代における女性への教養教育だけでなく、女性への職業教育というもうひとつの戦後教育の理念の実現という意味で使用していると考えられる。米短の役割をそこに積極的に見出そうとしている本名の態度がうかがえる。

その後戦後の混乱も徐々に収束してゆき教員就職もその採用の枠が狭くなるなか、学校や教員側にも教員就職を後押しし積極的に対応してゆこうとする態度が見られるようになる。昭和三十一年十二月学長の伊藤政次は『同窓会誌』四号において次のように言う。

新卒業生の就職は益々容易でなくなりました。学校は全職員を挙げて各方面に手をつくしています。卒業生の皆さんは、各現在の職場で母校の名を挙げて下さるよう最善を尽くして下さいと共にな、後輩の進路の爲めにも亦よき相談相手となられ、母校と連絡をとって職場開拓に御協力下さい。（三頁）

伊藤は対応策として、卒業生に職場での努力により母校の名声を高めることを求めるとともに、後輩の進路開拓のため母校と連絡を取るように指摘する。注目されるのは、卒業生が米短の評価を高めるといふ一種他力的なものに解決策を見出していることである。卒業生がいらないという新設の短大であることをふまえ卒業生自身に「開拓精神」を求めたともいえる。その一方で、後輩と短大とのつながりという組織化への動きがみられる。就職難のなかで、開拓精神と組織化という

ふたつの動向が並行しながら米短の重要な方針となつてゆく。ただその開拓精神による母校の名を挙げる行為のなかに、米短の校風を形成してゆこうという意識がみられる点が重要である。

本名は昭和三十二年九月『同窓会誌』五号において次のように指摘する。

本学も開学五年にして、未だ曾てない試練に際会した。今年度の入学者は始めて定員を割り、年と共に困難を加えて来た就職方面も今までにない不成績である。北海道に十数名赴任した者を除けば、就職しても多くは期限つき、或いは第二第三の希望職であらう。(中略：布施註) 郷里を遠く離れて北海道の教壇に立つ七十余名を始め、全国各地に散在して、勤労の精神を体し、職場に家庭に働く諸君の良き評判を聞く毎に、全く敬服の感に打たれ、嬉しくなる。諸君がすすくと大成して行く様に、母校も永遠に発展させたい。(五頁)

本名は北海道という教職の現場でまじめに働き米短の名を高める卒業生に心からのエールを送るとともに、そのような職場での努力という精神的な働きの部分に母校の発展のよりどころを見出そうとしている。

第3節 本名正吾の北海道教員就職ルート確立への努力

本名は昭和三十三年に「学生の就職斡旋」のため北海道に行き、教育関係の役所を巡回して情報収集と米短生の売込みを行っている。この渡道は混雑した二等車での巡回であつたようで体力的にかなりきつかつたようである。また東北諸県との教育関係役所も巡回したようであ

る。これに関する本名の手記は重要であると考えるので全文掲載する。小生宛卒業生から教員就職問題について種々の相談依頼がありますので、ここにまとめてお答えします。学校としては単に卒業見込生だけの就職問題だけでなく、旧卒業生の就職についてもできるだけ骨折を致しますから、遠慮なく何んなりと申出下さい。左は小生東北各県及び北海道の関係方面を一巡しての結論です。内地の場合

○各県に於ける教員就職は県に依り多少の難易の相違はありますが当今は採用試験に合格登録されても本採用になるのは容易ではありません。或る県の如きは本学卒業生八名登録されて未だに一名の採用もありません。本採用は県でやりますから登録者は県教育庁の小中教員人事主任の人に連絡をつけて頼みこむことも考えられます。

○産代病代の如き期限付講師は教育出張所の専決事項になつています。そしてこれには登録者でなくても(採用試験に落ちた者でも)採用してくれる県がありますから、出張所の次長あたりに顔出しして頼むことです。

○本学としては各県教育庁小中人事主係、山形県各教育出張所に小生顔出して名簿を提出、宜しく連絡をつけてあります。それで本人としては本人なり然るべき人を介して教育庁なり、教育出張所なり地教委関係課長あたりに連絡つけておくことが有効かと思っています。

北海道の場合

○北海道には現在百名近くの者が本採用で赴任、本学は道外に於

ける教員養成の三大機関（山大教育学部、本学、徳島大教育学部）とまで言われ、好評噴々たるものがあります。女子教員（家庭科免許状所持者）は未だに不足であり、音楽の実力などあれば非常に歓迎されます。

○現在第三次募集を考慮中であり、決定次第要項を知らせてくる筈ですから応募希望者は其の旨知らせて下さい。尚例年行われる道教育庁の面接は十二月頃と思います。

○採用試験は道で行う面接（会場は山形市）と各地方教育局で行うものと二本立になっています。背水の陣を布いて後者の面接を受けに出かける方が結果から言うとう利なそうです。徳島、富山あたりから出かける者もあるそうです。

○昨年までは面接不合格者、不受験者も特別に考慮して貰って採用されましたが、今年からは面接不合格者は道で絶対承認しないそうです。

○各教育局長から本学の同窓会支部を作り、相互の親睦協力を図るようにして貰いたいと言われてきたので、そのうちに各教育局管内別の名簿を作成して送りたいと思っています。（『同窓会誌』六、一七頁）

現在の教員採用の仕組みとは異なる部分もあるが、米短側が在学生のために教員就職のための道筋をつけるとともに、本名も言っているように卒業生からの教員就職相談も多く、産休などの代用教員についての情報もきまかく掲載している。

そして本州の教員採用情報だけでなく、特に北海道の採用情報を詳細に掲載している。本名と北海道の教育関係庁のやりとりからは、北

海道側も米短生を重要な戦力としてみていたことがわかり、米短と北海道の両者にとって米短生の北海道就職は重要な問題であったといえよう。そのため、北海道側も詳細な情報を本名に通知している。

例えば国語科二期生の卒業生は、山形県天童市内の小中学校に「産代」教員として出ていた。教員採用試験の結果は望ましくなく来年度もう一度がんばってみようかと考えていた。「これをやめて私に残るものは何一つとしてないのです」と自分には教員の道しかないとする。そして「この前北海道からの追加採用募集について御親切なおたよりをいただきました」「又北海道方面からそんな話がある時は今度こそ受験してみようと思いますのでよろしく御連絡下さいますようお願い致します」と述べている。（『同窓会誌』八、四九頁）

卒業生にとっても有力な就職は教員であり、採用試験に失敗しても再受験を考えておりその場合北海道は最後の本採用を得るための手段であったことがわかる。そのため北海道の情報は重要であり、情報を提供してくれる短大や同窓会の役割が重要視されていたことがうかがえる。

注目されるのは、北海道の各教育関係の役所から、米短の同窓会をつくり相互の親睦協力を図るよう本名に伝えていることである。本名もそれに対して各教育局管内別の名簿を作成したいと応えている点である。北海道側としては米短生が北海道に教員就職しているものの、広い北海道でのいわゆる「僻地教育」において孤立分散していることは好ましくないと考えていたのであろう。彼女たちの現場での孤独や苦勞といった問題を同窓会という横のつながりを作ることでやわらげ、さらに出身母体の米短とのつながりを強くし援助体制を構築する

ことで、今後の米短側と北海道とのつながりを強固にして卒業生をさらに供給してほしいと考えていたといえる。

本名のこのような努力は学生たちにも伝わっていた。学生は本名を漢文学の先生というよりは教員就職でお世話になった先生という感覚で認識していた。ある学生は昭和三十一年十二月の『同窓会誌』四号において「漢文学を通して我々に道徳教育をとく」と説かれるのでこの時間は深く反省させられる。今は就職の問題や校舎増築の問題で忙がしく、今年からは当県も試験制度なので狭き門もますますとざされてしまう。その中に立つて先生は色々とお骨折って下さるのには頭が上らない。授業時間に就職の話が出て来ないと何となく物足りない感じだ」(三二頁)と書いている。

また別の学生は昭和三十五年(一九六〇)十一月の『同窓会誌』八号において次のように記している。「北海道で教鞭をとっておられる方々にとっては特に思い出多い先生のお一人である。(中略…布施註)就職については、一期生の頃から特に北海道への開拓は御心配いただきましたし今多くの同窓生の方々が、異郷の地でしっかりと根をおろし活躍しておられるのも先生の御努力の結晶と申さねばなりません」(五四頁)

この記事は入院した本名をお見舞いした記事であるが、米短の学生たちの間に開学以来の本名の活動の経歴が正しく認識されていることを示している。本名は昭和三十三年の渡道の心労から体の具合を悪くし入院したのであった。お見舞いした学生たちは「これまで就職の事、国語科及び栄養士養成コースの設置認下等々短大の発展の為には奥様共々御協力くださったことをお聴きし、今さら感謝の念で一ぱいでし

た」と結んでいる。

第4節 網走地方での校風の対外的確立

こうした北海道への教員就職という状況を受け入れ積極的に支援しそこに米短の使命と発展の拠り所を見出し、卒業生には北海道という厳しい職場環境のなかで学校の名声を挙げてほしいとする短大や教員の姿勢と、それに応える卒業生の活躍とがあいまって、それが米短の校風であると認識されるようになる。学長の長岡弥一郎は昭和三十四年(一九五九)七月の『同窓会誌』七号において次のように指摘する。

私は、ここに、諸子と喜びを分たなければならぬ手紙を、最近に於いて、北海道網走地方教育委員会から、いただきました。それには、留辺蘂町立の小学校に奉職して居る、昨年度の一卒業生の勤務振りが、まことに立派で、おのずから、他の模範となつて居るそうありますが、それは、母校米沢短大の学風が然らしめたことであろうと思うから、なお三名の新人を推薦してくれということであります。そして、その三名は、すでに採用決定と相成りました。諸子は、この事実を朗報として聞き、喜んでくれることではありません。が、同時に、厳肅なる教訓を酌みとられたこと、思います。それは、我々の一言一行が、常に母校の名声に直結して居るということでもあります。(五十六頁)

網走という北海道においても特に遠隔地で活躍する卒業生の態度を網走の教育委員会が評価し、さらに米短の卒業生を採用したいと伝えてきたのであるが、網走の教育委員会はその勤務振りを米短の校風であると認識した。これは米短が常々卒業生に求めてきた開拓精神と教

員としての努力が校風として対外化したことを意味する。そしてそれが網走という米短の北海道教員就職においても特に多数が赴任した土地で発現したということが象徴的である。

米短と卒業生と北海道の教育関係庁という教員就職をめぐる三者の相互作用がここに結びつき、卒業生の「北海道での教員としての奮闘と開拓精神」という校風として客観的に確立したといえる。そしてそれは特に地域に限ったものではないのであるが、やはり北海道という遠隔地で現地の教育活動に奮闘し日本の教育に貢献する女性教員というイメージ像と一体化したものであったといえる。

短大や教員は彼女たちの奮闘が母校の名声を高め、発展の拠り所になるとして開拓精神を求めるだけでなく、本名の活動にみられるように北海道への教員就職のための便宜を図ってきた。しかし彼女たちの奮闘を、発展の拠り所というように表現しても校風であるとはまでは表現することはできなかった。しかし、網走の教育委員会がそれを校風と表現し学長がそれを追認したかたちで校風が確立したといえる。

その意味では、米短の校風は学生たちの必死の努力がありそれが対外的に認められたという形で成立したといえ、それが北海道の網走地方で認識されたということは、米短の校風が女性の教員就職への熱意とそれを地域的に強く必要とした北海道という一九五〇年代の社会状況の特徴のなかで形成され確立したものと指摘できる。そして校風の確立が後輩の就職を引き出すという好ましい役割も生み出すようになり、ここに校風の確立を通じての米短の特徴ある使命が社会的に発信できるようになったといえる。

第3章 北海道に教員就職した卒業生の活動と同窓会支部の設立

第1節 「僻地教育」と米短卒業生の「開拓精神」

北海道に教員就職した卒業生たちの現地での開拓精神とその成果が校風となって対外化し認識されたのだが、やがてそのような動向は同窓会の支部設立へとつながってくる。米短の同窓会支部は、最初に東京に、次に北海道の網走に結成されている。前述したように、北海道での同窓会支部設立は北海道教育関係庁側の要望もあり本格化してゆくのだが、その前提には遠い北海道の地で孤立分散しながらも助け合って教職にまい進する卒業生たちの相互扶助の精神が存在していた。

そして最初期に北海道に同窓会支部が設立されたということそれ自体が、設立初期の米短の北海道での教員での奮闘という校風そのものが具体化したものであり、北海道側の要請もあったということは校風の対外化＝確立を物語っていると考える。ここでは校風を確立させた最大の要因としての卒業生たちの北海道での教員活動での奮闘と、校風の可視化ともいえる同窓会支部の設立過程について検討する。

前述したように、米短の第一期入学者のほとんどが教員志望であったことは本名を驚かせた。第一期生にはさまざまな経歴をもつ人々が存在していた。一期生は次のように振り返っている。

開学当時のメンバーは、いま思い出しても楽しくなるような個性の人がたくさんいました。高校からストレートで進学した人になじって教職やその他の仕事をやめて入学した人がかなり多く、年

令や人生経験もまちまちで、いわば雑草の群れといったところが全体の特徴だったでしょう。この雑草達は他校のように自分たちをつつみ込んでくれる歴史も伝統もないという点では全く不利だったわけですが、反面成長に対する意欲が強く、今という開拓精神を身につけたという点では貴重な体験をしました。⁽⁵⁾

いまだ戦後の混乱が続く時期に戦後の理念である女性への教養・職業教育を地域で実現する高等教育機関として米短は設立されたが、一期生はまさにそれを目的として入学してきた人たちであったといえ、高校からの通常の進学者だけでなく、地域のさまざまな女性たちの受け皿になっていたことがうかがえる。彼女たちの入学の動機とは、戦前から女性の職業として確立していた教員になることであった。米短そのものが日本国憲法で明記された戦後の女性の生き方を具体化してくれる教育機関であり地域の女性たちもそれを求めて入学してきたのである。その意味では「歴史も伝統もない」という校風不在よりも、「成長に対する意欲」や「開拓精神」が前面に押し出された開学当初の雰囲気だったのだろう。

そのようななか、彼女たちは教員不足の北海道や東日本の各地域に積極的に就職していった。⁽⁶⁾同窓会は『同窓会誌』第四号から卒業生たちの文章を掲載するようになる。第四号は昭和三十一年という北海道冷害時に発行されたもので、内容も「今回の会誌は従来迄の総会報告号とは趣を異に致しました」と編集後記で述べている。(四六頁)

そのなかから拾いだしてみると、当然ではあるが北海道への不安が述べられている。家政科二期生で北見市の中学校に赴任した学生は、自分の意志で北海道に就職したがその大変さを列挙している。それは

いわゆる僻地校での勤務でありそこに女教員が自分一人しかないことへの苦しみであった。さらに冷害が起きたことで「これから先のことを思うと不安です」と正直な心境を吐露している。(一九頁)

家政科三期生で中川郡豊頃村の小学校に勤務した卒業生は、北海道への就職を考えていたがそれが十勝平野の大自然であるとは想像もつかなかったと、理想と現実の乖離にとまどいながらも、「内地の新しい空気を吸い新しい教育を受けた先生……と期待される処は大きく」と前向きに教員生活を送っていたという。(二四頁)

北海道だけでなく東日本のさまざまな県に就職して手記を投稿している卒業生もいる。家政科一期生で山形県高畠町の中学校に勤務する卒業生は、高畠に就職できたことを運が良いと述べ、第一期生は就職してもテスト価値として注目されるところとして一期生として自覚をもって仕事をしなければならぬと述べている。(二三頁)

また家政科三期生で福島県南会津郡南郷村の中学校に勤務する卒業生は雪が降ると「友達は北海道、新潟等で頑張っている……北海道は、十五日頃からラッセルが通ったとか、友達は淋しくないだろうか、いや、毎日がんばっているだろう」と、北海道に就職した友人を思い出している。(二五頁)

昭和三十二年九月の『同窓会誌』五号では、家政科二期卒業生の専業主婦の手記なども掲載されるようになるが、北海道でみると不安はあるがそこで前向きにやってゆこうとする姿勢が強くあらわれた内容が増えてくる。そしてそれは後輩たちに北海道で教員生活を送ることとはどのようなことであるのかという北海道の現状報告をかねていて理解できる。

家政科一期生で礼文島の小学校に勤務する卒業生は礼文島への就職を内地人にとって外国へでも行く気分であり人生始まって以来の不安であると表現する。僻地教育にとまどうもののやりがいがあるとし「毎日の学校生活が楽しい程になってきました」と報告する。一漁村であるがテレビも電気もバスもあり礼文島のくらしも伝えている。家業の漁師の生活の中で子供を学校に学ばせる親の苦労や風習を理解しながらなんとか学力を向上させようと努力するなど、北海道の「僻地」で教員として勤務することの現状報告もかねている内容となっている。

(三〇頁)

静内郡静内町の中学校に勤務する家政科四期の卒業生は、昆布漁の漁民の生活の様子に驚くものの、この町の子供たちを教育する以上なるべく生活に結び付いた教育の方法を考えたいと「浜の生活」に気を配ってゆこうとする。(三三頁)

教員として東日本に散らばっていった卒業生のあいだにおいても、とくに北海道に就職した友人たちは心の拠り所になり奮闘の象徴として認識されていることがわかる。高島に就職できた学生が運が良かったというように、北海道に渡った学生たちは自分の意志またはその他の要因で渡道したと考えられるのだが、僻地校での勤務の苦労は不安が多いものであり、それをやわらげるような現地での卒業生同士のつながりや米短からの支援などはまだ形成されていなかった。個人の奮闘として乗り切っていた状況であった。

昭和三十三年八月の『同窓会誌』六号になると、結婚して家庭と教員との両立が大変であるという生活の悩みや、二回目の赴任校での様子や、国語科一期生の手記が掲載され、教員の専門職としての仕事上

の悩みや葛藤が掲載されるなど、手記に時間経過にともなう卒業生の生活上の変化がみられてくる。

第2節 後輩の赴任増加と北海道への同窓会支部設立の萌芽

大きな変化がみられるのは昭和三十四年七月の『同窓会誌』七号である。前述したように、昭和三十三年に北海道側から同窓会支部結成の働きかけがあり、また三十四年に網走において校風が対外化し確立したという状況が見てとれたのであるが、北海道の卒業生たちのあいだにも今までにない動きがみられるようになる。彼女たちはそれまでは孤軍奮闘という状況であったのだが、この時期に卒業生で北海道に就職した後輩たちが地域に赴任するようになり、卒業生たちのあいだで現地での交流や組織化、さらには米短の在学生に教員就職情報を伝える動向がみられるようになるのである。

また、手記の掲載が勤務や結婚先の都道府県別に分類され、東京での勤務振りや長野での教員生活の様子など、卒業生が多様化しつつある状況がうかがえる。その一方で秋田県での産休講師という臨時的な教員生活の報告では、慣れた頃に終了する寂しさがあることを指摘する一方で、赴任校での短期間での教員生活のため教材研究よりも実際の教室づくりに入力しているなどの工夫を報告している手記もある。卒業生の多様化とは就職難という時代状況をうけつつのさまざまな現場性を抱えながらのものであったことがうかがえる。

そのようななか北海道では、家政科二期卒業生で網走市の中学校に勤務する卒業生は三年目であり今年こそは頑張りたいと前向きな抱負を述べる一方で、網走での米短卒業生の様子を具体的に伝えている。

このような手記はこれが確認できる最初のものである。

それによると、網走管内には毎年何人かが就職しているにもかかわらず会う機会がないこと、近くに誰が居るなどの情報はあるものの会うことはないこと、舞踊の講習では会うことなどを指摘する。卒業生が網走に少なからず教員就職しているにもかかわらず会う機会がないことがうかがえる。職域での定期的な交流の場が少ないのか、地理的に遠隔であるのか理由は明らかでない。そして網走の教員就職情報を次のように伝える。

北海道でも特に網走などは女教師が不足しておりますから今年も相当入れるのではないかと思います。網走の教員養成所も昨年から女子の志願しか認めておりませんしその第一回卒業は来春ですけれども、そうなれば今年の様なわけにはいかなくなるでしょう。

(二八頁)

また家政科五期生で紋別郡遠軽の高校に勤務する北海道出身の卒業生は次のように網走の状況を述べる。

網走地方は内地女教員と云うと筆頭に米沢短大が挙げられますが、その実感を新たにします事は、北見市街にて時々地方にいらっしやる同窓の方々に思いがけずお会いした時などです。ある時など私の家が時ならず同窓会場のようになってお互いに米沢の事など言葉と共に話し合ったりしたこともありました。母校の名も大きく評価されておりますこの地には多くの同窓の方々がおいでになって、又会合出来ます事を望むと共に母校のいつまでも続く発展をいのりまして、又明日も黒板の前で暮らしましょう。(二〇頁)

網走地方では女性教員として米短が有名であり評価が高いことがう

かがえる。少なからぬ卒業生がそこで奮闘努力しているが、彼女たちのあいだには組織としては未だ横のつながりは形成されておらず、日常的な出会いとおしゃべりの場以上のものには発展していない様子がかかる。

同じような状況は家政科三期生で常呂郡常呂町の小学校に勤務する卒業生の手記にも見てとれる。

常呂小学校で約七百人の関係者が集まって、学習過程の研究会が開かれ、〇〇さんと受付や記録の一端を手伝った。記録をしている時、在学中の法学や衛生学を受講している当時を思出した。網走の〇〇さんや佐呂間町の〇〇さんの姿も見ることができた。昼食時にそつと抜け出し浜まで行き、オホーソク海を眺め腰をおろして、食べたり、話したり楽しい一時を過ごした。(中略：布施註) 常呂町には四期の〇〇さん〇〇さん、五期の〇〇さん、〇〇さん、〇〇さんが居り時々顔を合わせ、いろんな話をする。(二四頁、〇〇の部分は布施が訂正した)

同地域に就職した教員同士の仕事上での交流があり、また顔を合わせるつきあいがあることがわかる。

後輩が赴任して寂しさがなくなる様子や米短生が教員として家庭科の技術を生かして地域に貢献している様子については、沙流平取町の小学校に勤務する卒業生の手記が伝えている。彼女は米短時代北海道に憧れと不安を抱きながら就職し三年目であり、学校は地域にとって小さいながらも部落唯一の文化センターであると述べる。

赴任当時山村に一人取り残されたような心細さを味合ったものですが、その後、続々同窓生の方々が町内に赴任され、研究会や集

会毎に顔を揃えなつかしさをわかち合いながらホダバ……等の米沢弁を活躍させてお互励げまし合っている。青年団活動も又楽しい。寸暇をさいて、寄りあう若人の集い。話はつきることなく続く男性を入れての料理実習会、農閑期を利用しての教養講座と学生時代習得した技術を利用して団員から喜ばれている。又父兄が個人的に仕立物を依頼することも少なくない。私は過去三年、「いかなる場に於いても、その職場においてなくてはならない人」をモットーとし、今後もそう心に誓いながら筆をおきます。(二六頁)

この地域では卒業生同士のタテのつながりが有機的に存在しているとともに、米短で習得した技術が地域に還元され喜ばれていることがわかる。自助努力により母校の名を高めてほしいという米短による卒業生たちへの呼びかけは、このような個人のひたむきな努力の積み重ねで達成され「校風」化したことがよく伝わる。

この時期の手記にはもはや北海道への就職の不安を前面に出した内容はなくなり、現状を正確に伝え積極的に北海道への教員就職をすすめるものが多い。家政科四期生で天塩郡天塩町の中学校に勤務する卒業生は次のように伝える。

北海道なんて寒くて………といって赴任するのをきらう人があるならそれは間違っている。東北の暖房設備の不完全な所よりずっと生活しやすい。僻地教育の悩みは数多くあるが、大自然の中に育った北海道の子等の気持は大きい、又僻地の子等程可愛いものだ。現在の教師生活に満足している私は、この土地から離れたくない、今や北海道は私の第二の故郷になりつゝある。(二三頁)

米短の学生が『同窓会誌』に目を通していたのか、またどのように

北海道に教員就職した先輩の情報を得ていたのかはわからない。本名をはじめ短大もいろいろな情報を獲得し通知していた。しかし何よりも先輩のこのような現実にくしくした情報は先輩たちに安心をあたえ北海道への就職を決断させることに寄与したのではないだろうか。北海道という北の大地への憧れと条件は悪い部分もあるが教員として就職できるという現実的な利益のみでは、さすがにやる気がある学生たちといえどもそう簡単には渡道を選択できなかったのではないかと考えるのである。

校風の対外化とその確立にはこのような卒業生たちの北海道での地道な頑張りと貢献とがあつて実現化したことがわかる。卒業生たちは北海道で最初孤立化して活動していたが、徐々に先輩たちが同一地域内に就職してゆくにつれて、仕事上の会合や日常の余暇を利用して関係を結ぶようになる。とくに網走地方では米短卒業生が少なからず赴任し存在感を示すまでにいたる。仕事上での活動により米短卒業生への評価が高まっており、彼女たちなくしては北海道の僻地教育は成り立たないといっても過言ではないくらい重要な役割を果たしていた。

北海道側が本名に「同窓会支部を作り、相互の親睦協力を図るようにして貰いたい」と要望した背景には、このような北海道における卒業生たちの教員活動に対する高い評価が存在していたといえる。彼女たちは校風を現実社会のなかでみずから作り上げそれを地域社会に可視化させ認めさせていたのである。

その一方で、同じ北海道道東地区でも根室に赴任した卒業生は「知人一人居ない北国」と表現するなど、卒業生があまり赴任しない地域も存在した。また長野県に赴任した卒業生は「同級生も同窓生もいな

いこの伊那の地」と述べている。本州の関東以西よりも北海道の特定の地域において逆に米短生の居住密度が高くなり、卒業後に緊密な関係を結ぶことが可能になるという特徴的ともいえる現象が生じていたことがわかる。

第4章 同窓会北海道支部設立と教員就職の減少

第1節 上村良作による同窓会支部設立の訴え

短大側は卒業生が後輩の「職場開拓」のためにも短大と在校生と連絡を密にすることを求め、北海道への教員就職を後押しした。そのような動向は昭和三十三年頃からは同窓会支部の設立による連絡協力体制の確立という動きになってくる。昭和三十三年に本名が北海道・東北の教育関係庁を巡回した際に、北海道側から同窓会誌支部の設立による相互の親睦協力を図るようになってほしいと要望されたことは前述したが、その後同窓会支部設立の動きが活発化してくる。

前述したように短大・在校生が意識的に卒業生とつながりをもつ契機となったのは昭和三十一年の北海道冷害であり、上村は「各般にわたり有機的な結びつきをもつようにしたいのである。これが、一、二年生大学の学風や伝統を形成してゆく力になるのである」と理論づけた。校風は確立するだけでなく脈々と後輩たちに受け継がれてゆくことが必要条件となってくる。

ただ先輩と後輩が一時的につながり校風が一時的に確立しても、それは学校、しかも米短という戦後新制度として設立された短大という

「一、二年生大学」の発展の原動力としては不十分でそれを継続化させる必要があった。そのための具体的な措置として同窓会支部設立による継続的な先輩後輩のつながり、さらには大学と卒業生のつながりの維持とそれによる校風の確立維持が求められたといえる。

そして校風が教員就職、特に北海道での就職で発現したことをうけ、教員就職のさらなる強化、特に北海道とのつながりによる就職の強化が背景としてあったといえる。そのためには北海道の卒業生教員たちの連絡を密にするとともに短大と連携してゆく必要があったと考えられる。

具体的に同窓会支部設立の話題が確認できるのは昭和三十四年『同窓会誌』七号からである。同窓会会長は昭和三十四年度総会で同窓会発足八年目の今年を基礎固めするとともに大飛躍をする時に達したと指摘し、会運営の分掌制・会報の発行・夏期講習会の実施などの新事業を計画したが、そのなかに支部設立があった。同窓会会長は「東京、北海道の会員の方々からの御要望に答えて支部結成することに致しました。（中略：布施註）各支部二人〜三人でも可、ぜひ作って下さって本会に届出て下さいませ、それがもつとも自然な会の形態であり本会が大盤石のもとに広く発展出来る礎となると存じます」と指摘する。（九頁）

上村良作は昭和三十五年の『同窓会誌』八号においてさらに支部設立の意義を次のように述べている。

大学の理想は、その卒業生がそれぞれの立場で、社会に顕現してはじめて稔るものであると思います。その意味で、同窓生諸君の活動が期待される次第です。どうか各自がこの自覚をもって社会

に立ち向って頂きたいものと思います。そして各支部の結成とその活動、同窓会自体の事業のあり方が、この方面でも大きな役割が果されることでしょう。(一五頁)

上村は卒業生の活躍と大学・在校生徒の有機的な結びつきのなかから校風が形成されてくると指摘していたが、その具体的なかたちが同窓会支部の結成であり、卒業生たちの同窓会活動の活発化が校風の定着化を推し進めると考えていた。今までは短大側は「つながれ」とか「母校と連絡をとれ」とか言っていたのだが、ここに至って同窓会支部という具体的な提案と変化している。

同窓会や教員が昭和三十四年をさかいとして同窓会を基盤として組織化を図ろうとしたのには、「同窓会もはや家政科六期生、被服科七期生を迎え、会員数八〇〇名ともなりました。つきましては、以前より同窓会支部必要の声が高まりつゝ、ありましたので、今年度はこの問題を大きく取り上げました」(『同窓会誌』七、六七頁)と同窓会が指摘するように、設立から数年がたち卒業生も増加し支部設立の準備と気運が高まったことがある。そして各地に散在する卒業生からも支部を設立したいという要望が高まったことがあった。

そして昭和三十四年八月に東京支部が結成された。次いで北海道支部が昭和三十五年十一月に結成された。名称は北海道網走地区支部となっている。その後、昭和三十七年に山形支部が一・二名で結成されている。東京支部に次いで北海道支部が二番目に設立されているが、この順番は就職動向をそのまま示しているといえる。

第2節 北海道研修旅行の果たした役割

それでは支部結成の側の状況はどうであったのか。北海道に教員就職した卒業生はそのほとんどがいわゆる僻地教育を担う教員として北海道でもとくに道南・道東地方に赴任したと考えられる。前述したように、当初は広大な地理のなかにポツポツと散在した卒業生が、次第に後輩も同地方に赴任するようになり、教員の研究大会や日常の場において顔を合わせる機会も多くなっていた。そのような状況はとくに多くが赴任した網走や北見地域で確認できることは前述したとおりである。

ただ、研究会や日常の場においてたまたま顔をあわせ「ただもうなつかしさのあまり近すぎ、旧知の友のように話合う」ことはあっても、地理的に広いためなかなか「どのような先輩、後輩が渡道し同じ苦しみと喜びの中に生活しているのだろうか」(『さわらび』十三、昭和四十年九月、二二―二三頁)という組織的な状況の把握までにはいたらず個別分散的に教員生活を送るという状況であったといえる。また北海道に渡道した卒業生たちの「変動が激しい」(『さわらび』十四、昭和四十一年十一月、三頁)ことも影響したと考えられる。教員などで就職して渡道しても、現実の生活の厳しさや臨時採用による不安定または結婚による移動や帰郷などを選択した卒業生も多数存在したと考えられ、全体を把握し組織化を進めることは、ただでさえ教員生活で多忙な北海道の卒業生たちだけの力では不可能であったと考えられる。

しかし彼女達のあいだでは「もし本部に遠い会員だけで、支部を

通して本部とつながりをもち、互いに励ましあえるための会が持てたらというような話合いが、所々にわき上がって」(『さわらび』十三、二二―二三頁) おり、同窓会の支部的なものを作りたいという動向の萌芽は存在していたようである。また変動の激しさも、逆に名簿作りや組織化を進めなければならないという意識の形成に寄与したともいえる。

もうひとつ北海道支部設立の前提として重要な動向は、米短が開学当初から実施していた研修旅行の問題である。研修旅行は開校した昭和二十七年にはやくも被服別科一期生が伊勢崎方面に織物産地の研修として実施し、二十八年に家政科一期生が東京方面に一泊で実施したことにはじまる。家政科二期生は昭和二十九年に伊豆・大島をめぐる東京で原のぶ子教授のファッションショーを見学する三泊四日の旅行を実施している。これを見ると、研修旅行は研究を深める目的とともに卒業旅行の内容もふくんだものであったと考えられる。

そして昭和三十一年からは北海道への研修旅行が開始される。十月十五日から二十二日までの日程で家政科・被服別科共同で実施され、函館・札幌・常山溪・苫小牧・白老・登別・洞爺湖・昭和新山・函館とまわるコースであった。途中白老小学校に立ち寄り校長先生と卒業生のお世話になっている。以後研修旅行は継続して北海道で実施された。

この時期北海道に研修先が変更になり以降も継続した背景には、北海道冷害を契機として大学や在校生が積極的に北海道に教員就職した卒業生を見出し援助するという動向がみられ、そのような北海道への注目の高さの現れであると指摘できる。さらに具体的に指摘すれば

上村良作が述べるように「就職戦線が近県・東京方面から北海道方面へと主軸を転換した時期で」あり「先輩に続けという開拓精神が、その内にひそめられていた」ことがあった。(『さわらび』十六、昭和四十三年九月、七頁)

教員採用も山形県では昭和三十二年度から試験制となり米短生に「狭き門もますますとぎざされてしまう」(『同窓会誌』四、三二頁)と認識されるとともに、全体的な就職状況も徐々に悪化していた時期でもあった。そのようななか、本名が昭和三十一年度の教員就職状況を「北海道に十数名赴任した者を除けば、就職しても多くは期限つき、或いは第二第三の希望職であろう」(『同窓会誌』五、五頁)と指摘したように、北海道への教員就職は渡道の決断さえあれば正規就職の最後よりどころであった。

このような短大側と学生の北海道への教員就職の意識化と目的化が明確となったこの時期に研修旅行も北海道へと変更になったのであった。そして就職先が北海道の全体へと広がってゆくなかで、旅行先も「初めは道南の小回りだが、次第に大回りとなった」(『さわらび』十六、七頁)という。研修旅行は米短の北海道教員就職の状況を反映したある意味「政治的な」行事であったといえる。

昭和三十五年七月に実施された北海道研修旅行は北海道に同窓会支部をつくる目的をもって実施された旅行であり、まさに研修旅行のそのような政治性を強く示したものであったといえる。この年度の研修旅行は同窓会副会長が兩名旅行に帯同し、北海道への同窓会支部設立に具体的に動きだした端緒であった。

今回の研修旅行は、函館・札幌・釧路・登別・洞爺湖・函館とまわ

るもので道東の釧路にも範囲が広がっている。旅行先では教員の卒業生と、学生や同窓会副会長が懇談している。面会したある卒業生は七月中旬に米短から北海道研修旅行の日程をもらい、当日は職員会議を途中で抜け出し同期生といっしょに滞在先の旅館を訪問している。

実際に支部設立についてどのような話し合いがもたれたのかは明らかでないが、この旅行前にすでに「本部から連絡をうけた時は懐しく、連絡のつく限りの会員でお迎えした」という（『さわらび』十三、二二～二三頁）。前述したように北海道の卒業生のあいだで支部結成の機運が高まっていた時でもあり、支部設立の意思を本部からうけたうえで旅行団を迎えているので具体的な話し合いがもたれたのであろう。

このような経過のもと、昭和三十五年十一月に北見市において東京支部に次ぐ第二の支部である北海道網走地区支部が結成された。名称が北海道支部、または北海道網走地区支部と網走が明記されているのは、前述したように卒業生がおもに道東に赴任し北海道支部設立の動きが道東地区で活発であり、支部活動も「最初、網走管内の活躍が中心だった」ためであったと考えられる。（『さわらび』十三、二二～二三頁）。

昭和三十五年以前までの研修旅行は、いわば北海道への卒業生の状況視察と在学生への北海道就職の地ならしという側面であったのだが、今回はさらにすすんで卒業生の同窓会支部設立うながす旅行となった。

そして昭和三十四年に、それまでことあるごとに主張されてきた、卒業生の頑張りにより母校の名声を高め先輩後輩のつながりを密にすることによる校風の形成という目的が留辺蘂で対外的に確立したこと

により、その動きはさらに同窓会支部を設立して卒業生同士の連絡を密にするとともに、母校と組織的につながることに後輩の就職のための支援実施へと発展したといえる。つまり校風の確立は、同窓会支部設立というかたちをとって組織化され継続化されることになったといえる。北海道の教員就職でみられた校風の確立は、同窓会支部設立による在学生の北海道教員就職への支援へと受け継がれることになるのであった。米短の同窓会北海道支部設立は、校風確立とその組織形態からして北海道の卒業生教員の動向と密接に結びついたものであったといえる。

第3節 米短卒業生の就職範囲の拡大

以後、同窓会支部づくりは就職と教職と校風が三位一体となり推し進められていく。昭和三十八年（一九六三）十二月の『さわらび』十一号において上村良作は次のように指摘する。

本学の学生の気風、卒業生の社会的評価、これは本学の誇りです。本学の教育内容もまた、その時々、他学に決して優るとも劣りません。みなさんは、どうか、数少ない県立大学（昭和三十八年四月に県立移管：布施註）の卒業生として誇りをもってご活躍ください。一本の大樹となつて、みんな伸びていくってください。さいきん、ほうぼうの教育関係者が本学の卒業生をほしいといっておいでになります。そして、大学と卒業生とのつながりの密であることをうらやましいといつてほめていかれます。中には、進んで支部結成に協力しましょうとおっしゃるかたもあります。この上とも支部をつくることにしましょう。教育出張所管内単位の組

織づくりからはじめてみてはいかがですか、これが当面の課題だ
 と思います。だれが中心でもよい、まず発足させましょう。(八頁)
 さらに上村は昭和四十年(一九六五)九月『さわらび』十三号にお
 いて、同窓会支部の拡充とそれによる米短の発展を「広大な学園」構
 想として表現する。

「こういう職につきたいのですが、先輩で同じ職についている方
 がないでしょうか。〇〇地方に行っている先輩はいらっしゃい
 ませんか」というような質問を、学生から受けることがあります。
 本学も、それだけの年輪をもったことを、しみじみと考えさせら
 れます。1、2期生といわず、少し前の頃までは、本学には先輩
 がいないが、是非開拓してくれ」という返事しかできなかつたの
 に、と思うのです。開拓精神が、各自の幸福をもたらすと信じ、
 敢えて声を大にしたのですが今や、その拓かれた道は、後輩のた
 めにも通じ、実にりっぱに出来つつあります。本学は、その点で、
 誰はばかることのない誇りをもっています。そして、同窓生諸君
 に感謝しています。道は、狭いより広い方がよく、標識があれば
 一層よいのです。そこで、私は、同窓会支部を各地につくろう、
 という声がありあがることを希望したいのです。先頃、京阪神支
 部をつくりたいということで、大学に来て下さいました。ほんと
 うに嬉しく思いました。このように、県をまたいでも出来るとこ
 ろはそれでよいでしょう。出来にくいところは、県の中で、更に
 小分けになってもよいと思います。そして、その各支部が本部と
 連絡を密にすることによって、先輩、後輩が密となり、協力し合
 える態勢が出来るでしょう。『雑草』の根は、一層、広く、深く、

強くなるでしょう。母校は、『広大な学園』の構想をもって進も
 うとしています。(九―一〇頁)

卒業生の就職先が恐らく教員以外にも広がり、いままでの北海道教
 員就職にみられるような開拓精神や自助努力という悲壮な状況はしだ
 いに薄らぎ、現在のような卒業生の存在を前提とした就職活動的なも
 のに変化した状況がうかがえる。同窓会支部も教員に影響をうけて設
 立されるというよりは、親睦と在校生の就職活動を支援するという一
 般的な役割のもと必要であるとの認識になっている。このような今日
 考えられるような通常の大学と卒業生の関係を上村は「広大な学園
 構想」ととらえていると考えられる。

このような米短の新たな動向は、この時期の社会状況や学生気質
 の変化と結びついて現れたものであった。再び上村は昭和四十三年
 (一九六八)九月の『さわらび』十六号で次のように述べている。

北海道の教員就職者が二百名を越えたのも、今は昔の物語りとな
 り、北海道の研修旅行も途絶えた。学生は団体より個々のグルー
 プ的活動を行なっている。それは社会的経済的事情にもよるが、
 大量就職の場を失って可能性を賭けながら、個々に職場を開拓し
 ている現況にも似ている。本学の就職戦線は、社会の趨勢を考え
 合わせながら、新たな転換と、開拓精神を燃えたせねばならな
 い時にきた。それと同時に考えさせられるのは、先輩と後輩と繋
 ぐ強靱な結びつきをどのようにして生み出すかである。先輩に続
 けという志向は、手を拱いていては生じない。この時、さわらび
 会が、入学式に入会式を行なうことや同窓会館建設を打ち出した
 のは時宜を得ている。今、母校も、将来の大きな構想を考えてい

る。本会も、さらに多くを考える時期であろう。(七頁)

恐らく日本の社会経済構造の変化により、この時期米短の就職動向も大きな変化をみせるようになったといえる。米短の最大の特徴であり強みであった北海道への教員就職も、北海道の教員採用状況や僻地教育の低下などの諸条件の変化から減少して行っただと考えられ、北海道研修旅行も途絶えた。それまで米短生の最大の就職先であった教員、とくに北海道への就職があてにできなくなったことで、学生は各自が職場開拓する状況となったが、それは以前の開拓精神とか自助努力というよりは、学生個々の個性と社会経済状況にみあった個別的な就職活動という今日的な内容に変化してきたということであろう。

米短の就職状況も昭和三十八年時点において(表7)、栄養士課程の開設による工場や病院への栄養士就職、生活改良普及員への採用などが増加している。昭和四十一年十一月の『さわらび』十四号のなかで米沢市内の病院で栄養士として勤務する卒業生が「女性の職業範囲の伸びてきつつある現代」(一八頁)と表現するように、教員は就職者全体でいまだ五六%と半数以上の割合を示しているものの、北海道頼みの教員一辺倒の状況とは異なる様相を徐々に示すようになる。

この時期に上村が同窓会に求める役割もこのような新しい環

表7 昭和38年現在卒業生の職業分布

家庭	1051	53%	
小学校教員	207	515 (26%)	56%
中学校教員	225		
高等学校教員	36		
各種学校教員	47		
一般事務	202	10%	22%
栄養士(工場)	24	64 (3%)	7%
栄養士(病院)	33		
栄養士(学校関係)	7		
官公署	57	3%	6%
幼稚園・保育園	55	3%	6%
その他	15	1%	2%
生活改良普及員	12	1%	1%
	1971		920

『さわらび』14、昭和41年11月、16頁より作成。

境に適した同窓会活動であったといえる。この時期、大学・同窓会活動・学生の意識などから、北海道・教員・開拓精神という開学以来米短がもっていた精神的要素が徐々に弱まり忘却されてゆくことになるのではない。確立した校風もその初期的な役割を終えて、次の時期を担うための校風確立のためのあらたな議論が行われてくると考えられるし、もしくはそのような議論はもはや行われなくなるのかもしれない。それは昭和四十五年以降、一九七〇年代における米短と日本の社会経済状況をふまえた次の検討課題であろう。

おわりに

米短において最初に校風が議論されるのは国語科の学生の手記であった。米短には校風がないと嘆いたが、その背景には新設学科ゆえの家政科との孤立や卒業後の就職の不安があった。そして同窓会に校風を形成する精神的支柱を求めたのであった。米短の校風形成の原動力として当初から同窓会が期待されていたことは注目される。

開学から五年目の北海道冷害・五周年記念事業において前向きな校風認識が形成されるようになる。北海道に教員就職した先輩を積極的に発見し、短大と同窓会と在学生が一体となって援助活動が行われる。そして援助活動を通じて形成される先輩後輩の有機的な結びつきが校風を形成する原動力になると期待された。

新校舎建設などが行われた五周年記念事業によって学生たちは米短が本格的に整備されたと実感し、前向きな校風認識が形づくられるようになる。このように形成され始めたばかりの卒業生や同窓会を重要

な支柱としながら校風が形成されるようになるが、まだ米短の校風が確立されたわけではなかった。

校風が確立されるのは北海道に教員就職した卒業生たちの活躍によってであった。初期卒業生のほとんどが教員として就職し、とくに北海道に赴任したが、これは教員不足に悩む北海道に行けば正規教員に採用される可能性が高いことが背景にあり彼女たちは意を決して渡道したのであった。

当初短大側は教員志望者が多いことにとまどったが、それを米短の発展の拠り所とみなし積極的に支援するようになる。そして北海道で卒業生が教員として奮闘することが母校の名声を高めるとして声援を送るようになる。そのような努力は昭和三十四年の網走地方における米短の「北海道での教員としての奮闘と開拓精神」という校風の対外的確立となって実をむすぶ。

米短の校風は学生たちの必死の努力がありそれが対外的に認められたという形で成立した。それが北海道の網走地方で確立したということとは、米短の校風が女性の教員就職への熱意とそれを地域的に強く必要とした北海道という一九五〇年代の社会状況の特徴のなかで形成され確立したものだと言指できる。そして校風の確立が後輩の就職を引き出すという好ましい役割も生み出すようになり、校風の確立を通じて米短の建学の理念と社会的使命が実現可能になったといえる。

短大側は確立した校風を継続化し具体化するために大学・在校生徒と卒業生の結びつきを強めることを意図した。そのための具体策が昭和三十五年十一月の同窓会北海道支部設立であった。以後同窓会支部づくりは大学とのつながり・在学生の就職支援・校風の発揚の三位一

体を柱としてすすめられていく。

米短にとって校風をめぐる議論は、開学したばかりの米短が戦後の混乱がまだ残る日本の社会経済状況の中、いかに建学の理念と社会的使命を果たして生き延びてゆくのかという模索そのものであった。当時の教員・在学生・卒業生・同窓会における校風を議論し探し求める行為は、米短の進路と実績を確実なものとし社会のなかに米短をしつかりと根付かせようとした彼らの願望と努力の姿であったといえる。その意味において、校風をめぐる議論とその確立化の過程そのものが初期米短を動かした原動力であったのであり、校風はその役割を十分に果たしたといえる。

米短の校風としての「教員としての奮闘と開拓精神」はとくに地域を限ったものではないが、北海道という遠隔地で現地の教育活動に奮闘し日本の教育に貢献する女性教員というイメージ像と一体化したものであったといえる。その意味で一期生がもっていた米短は歴史も伝統もないと嘆くより開拓精神を身につけ社会に進出するという個性が、厳しい社会状況のなかで必死に生きてゆくとした結果自然と北海道で発現したともいえる。米短は開学当初自らを「裏日本の文化的に恵まれない女子のために大学教育を受ける機会をより多く与え⁷⁾る大学と自己規定したが、米短の確立それ自身が北海道という明治維新以来の日本の「外部性」を通じて達成されたといえ、この問題は今後とも十分に検討してゆく必要がある。現在のわれわれが思い描けないほど、開学当初の米短と北海道は相互に結び付いており、現在ではそのような事実も歴史も渡道女史たちの奮闘の記録とともに忘れ去られようとしている。上村は「北海道に本学の就職を開拓して下さった御

心労は実に尊いものです。私はその体験録をまとめること」ができればと述べているが（『さわらび』十三、一〇頁）、どうなったのだろうか。

註

（1）『同窓会誌』は米沢女子短期大学同窓会である「さわらび会」所蔵のものを使用した。使用に際しては梅津奈菜子氏に御教示頂いた。

（2）「昭和27会議録」（米沢市役所所蔵）、議会史料の使用にあたっては米沢市議会事務局の堤治氏の御教示を得た。

（3）昭和三十一年の北海道冷害については『昭和31年北海道冷害誌』（北海道、昭和三十三年三月）

（4）『米沢女子短期大学十年史』（米沢女子短期大学、昭和三十七年十月）二六頁

（5）『米沢女子短期大学十年史』五八頁

（6）米短で長らく教鞭をとられた千喜良英二氏（元学長千喜良英之助氏御子息）夫人の千喜良淑子氏への聞き取り調査（二〇一五年三月三十一日布施研究室で実施）によると、淑子氏は戦後山形第一高女を卒業後、二年間山形銀行の秘書課で働き、その後東京の実践女子大学に学び卒業後は助手として大学に残った。助手を退職するにさいして、伊豆諸島の利島の高校の先生から教員の誘いをうけたという。淑子氏はその文章に感激したが利島には行かず、昭和三十年に米沢東高校の教員になった。淑子氏によると当時は遠隔地域の学校では新制大学を卒業した新卒の先生を欲しがっていたという。

（7）『米沢女子短期大学十年史』四頁

